

# 京都大学教育研究振興財団助成事業 成 果 報 告 書

平成26年4月28日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団  
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局 地球環境学堂

職 名 学 堂 長

氏 名 藤 井 滋 穂

|            |   |                           |                            |             |
|------------|---|---------------------------|----------------------------|-------------|
| 助成の種類      | 平成25年度 ・ 社会連携助成   |                           |                            |             |
| 事業名        | 平成25年度 京都大学地球環境フォーラムおよび嶋臺塾の実施   |                           |                            |             |
| 実施期間       | 平成25年7月6日 ～ 平成26年3月19日  |                           |                            |             |
| 実施場所       | 京都大学時計台記念館百周年記念ホール、嶋臺塾  |                           |                            |             |
| 参加者        | 総数  | 459名                      | 内訳                         |             |
|            |   |                           | 地球環境フォーラム 281名、嶋臺塾<br>178名 |             |
| 成果の概要      | タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> 有(嶋臺塾記録等)  |                           |                            |             |
| 会計報告       | 事業に要した経費総額  |                           | 2,720,130円                 |             |
|            | うち当財団からの助成額   |                           | 2,100,000円                 |             |
|            | その他の資金の出所   | (機関や資金の名称) 京都大学 運営費・全学経費等 |                            |             |
|            | 経費の内訳と助成金の使途について  |                           |                            |             |
|            |   | 費 目                       | 金 額 (円)                    | 財団助成充当額 (円) |
|            |   | 会場借料                      | 47,250                     | 47,250      |
|            |   | 印刷製本費                     | 1,837,416                  | 1,222,116   |
|            |   | 謝金                        | 540,140                    | 540,140     |
|            |   | 旅費                        | 25,820                     | 25,820      |
|            |   | 通信運搬費                     | 14,240                     | 14,240      |
|            | 委託費   | 244,350                   | 244,350                    |             |
|            | 消耗品費  | 10,914                    | 6,084                      |             |
|            | 合 計   | 2,720,130                 | 2,100,000                  |             |
| 当財団の助成について | <p>(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)</p> <p>貴財団のご支援により、地球環境フォーラムおよび嶋臺塾を各3回開催しました。毎回それぞれおよそ100名、60名程度と安定した参加者があり、京都大学の環境問題に関する研究成果を発信する場として、市民の間でも定着したものとと言えます。また、嶋臺塾については、「記録」を紙媒体で編集・出版し、広く配布することができました。地球環境学堂にとっても、市民や外部の研究者との対話を通じて、今後の教育研究に役立つフィードバックを得ることができました。今後も引き続きご支援を賜ります様、お願い申し上げます。</p> |                           |                            |             |

## 成 果 の 概 要

京都大学大学院地球環境学堂長 藤井 滋穂

京都大学大学院地球環境学堂では、教育研究成果を学内外へ発信し、その成果に基づいて今後の社会の在り方を市民と共に考え、その共同作業の結果を教育研究活動にフィードバックさせるために、地球環境フォーラムおよび嶋臺塾を開催している。地球環境フォーラムでは、大学内外の研究者からの話題提供の後に参加者も交えて広く議論する場としている。嶋臺塾は会場も伝統的な京町家として、「衣食住」など生活文化につながるテーマについて、本学教員と京の伝統文化を支える文化人による話題提供を受け、参加者全員で語り合う場を創りあげている。このように、アカデミックなテーマについて議論する場と、暮らしに密着したテーマについて語る場を提供することによって、最新の地球環境学の成果の共有と、地球環境をめぐる社会連携への展開をはかっている。

平成 25 年度は第 16 回から第 18 回まで計 3 回の地球環境フォーラムを開催した。

第 16 回は、「これからの日本の食卓」をメインテーマに、「窒素化学肥料が地球の人口増加を支え環境を破壊した」（間藤徹 農学研究科教授）、「食の豊かさを問い直す」（吉野章 地球環境学堂准教授）、「日本のお魚事情」（鷺尾圭司 独立行政法人水産大学校理事長）の 3 つの講演と総合討論を行った。私たちが口にしていく食べ物がどのように生産され流通しているのかを環境汚染、グローバル化などの観点から考え、それらが今後どのように変わっていくのかを展望する機会となった。

第 17 回は、「地球のつかい方」と題して、「グローバルな環境ガバナンス」（宇佐美誠地球環境学堂教授）、「コモンズというしくみ - 自然、地域社会、そして復興」（宮内泰介 北海道大学教授）、「農業の環境知と生物多様性」（光田重幸 同志社大学准教授）の 3 つの講演と総合討論を行った。同時代および未来の世代にできるだけ負担を強いることのない地球のつかい方とはどのようなのかを、グローバルからローカルなスケールにわたって考えた。

第 18 回では「暮らし・環境・平和 ～ベトナム社会のいまと日本の役割～」という題で、解放後およそ 40 年を経ようとするベトナム社会の現状と日本とのかかわりについて焦点をあてた。ここ何年かにわたって地球環境学堂がベトナムで進めてきた研究プロジェクトの紹介を冒頭で行い、続いて「フェの森、里、海、人から学んだこと」（水野啓 地球環境学堂特定准教授）、「歴史的町並みの保全と活用：ベトナムにおけるヘリテージ・ツーリズムと日本の協力」（安藤勝洋 昭和女子大学客員研究員）、「戦後日本とヴェトナムー回想と未来展望」（古川久雄 NPO 法人平和環境もやいネット理事長）、「ベトナムの経済発展と環境問題：日本への期待」（チャン・ヴァン・ナム ダナン大学総長）の講演と総合討論を行った。また、在大阪ベトナム総領事館のカオ・アイン・ジュン領事からも、日本の大学に対する一層の協力への期待を込めた挨拶があった。

6 年目を迎えた地球環境フォーラムには毎回ほぼ 100 名に近い参加者があり、地球環境問題

を様々な角度から分かりやすく市民に伝える場として定着したと言える。

嶋臺塾の平成 25 年度の活動としては、まず、平成 24 年度に行った 3 回の嶋臺塾の記録を編集し、500 部を印刷、約 400 部を配布した。続いて、「川」「山」並びに「大気」をテーマとした 3 回の嶋臺塾を開催し、延べ 178 名の参加者を得た。

初回（第 27 回）は、「鮎香る川」と題し、夏の京料理に欠かせない鮎を通して、私たちの川に対する接し方について考えた。京料理店・熊彦のご主人、栗栖基氏からは京料理の歴史、食材としての鮎の特徴、鮎のおいしさを引き出す調理法についてお話しがあった。地球環境学堂の宮下英明教授からは、藻類研究者の立場から、鮎の生態とエサである藍藻、そしてその藍藻を育む川の様子についての解説があった。京料理という完成された食文化も、食材を育てる川あってのことで、その川は生きものそのものであり、水質や流量だけ維持しても意味が無く、ましてや川を「水を流す道具」程度にしか考えられないようではいけないことを、改めて知らされた会となった。

第 28 回嶋臺塾は、「極地を 生きる ちから」と題し、極地環境における生物の適応力について考えた。標高 8,000 メートルを超える山 14 座全てを酸素補給無しに登頂されたプロ登山家の竹内洋岳氏から、酸素が少なく、通常は人が生きられない高山に徐々に体を慣らしながら適応していく登頂の様子を、貴重映像と軽妙な語りでお聞かせいただいた。空気中の酸素濃度の変化への生物の適応を研究されている工学研究科の高橋重成氏からは、地球が誕生してから今日まで、地球上の酸素の変化がもたらした生物の進化や、酸素濃度の変化に対応する体内のメカニズムにかかわる最先端の研究結果をたいへんわかりやすく解説いただいた。会場とのやりとりでは、人の能力の可能性や数万年後の人類に話しが及び、環境や文化を守ることが話題となることの多い嶋臺塾で、ひと味違った雰囲気で盛會を得ることが出来た。

第 29 回は、「地をおおうものの現在（いま）」と題し、大気汚染と苔の競演が行われた。地球環境学堂で大気汚染を計測されている梶井克純教授から、大気汚染のメカニズムと現状について解説いただき、現在の日本の大気汚染はかつてのように工場からの煤煙を減らせばすむものではなく、きれいな大気にするための道筋は社会的な問題であることがわかった。また、信州大学の石善隆氏からは、苔の生態や苔の美しさの秘密、苔を愛でる日本人の感性について、きれいな写真を使っただけの問答があり、楽しい講話であった。同時に、苔は大気汚染や気候の変動に最も敏感な植物で、苔を通して見る京都の現在も教えていただいた。さらに、庭師の阪上富男氏からは、日頃の仕事をふまえて、お二人のお話についての感想をいただいた。先端科学と感性を通じた問いかけから、私たちが暮らす空間の現在について見つめ直す機会となった。